

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2274100524		
法人名	社会福祉法人寿康会		
事業所名	グループホーム高松		
所在地	静岡県静岡市駿河区高松2625		
自己評価作成日	平成22年8月19日	評価結果市町村受理日	平成22年9月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyo-shizuoka.ip/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2274100524&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社システムデザイン研究所
所在地	静岡県静岡市駿河区馬淵2-14-36-402
訪問調査日	平成22年9月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設してから、6年が経過し、入居時に自立していた方々も、認知症が進行し、ホーム全体が、重度化してきました。そのため、ホームの役割も変化してきました。平成21年度からは、看取りも始めました。その中から、職員は色々な事を学び、成長してきました。そのことを介護の中に活かし、生活を考えています。現在は、自立出来ている方と、ほぼ全介助の方が半々になりました。一人ひとりのニーズに合わせて、日々の生活を組み立てています。食事が困難になれば、ミキサー食への変更、より安全に、確実に食べられる方法を考えています。外食が好きであれば、回数は少ないながらも、外に出かけられるように考えています。また、看護師がいるため、医療面でも即対応でき、症状を見極め、医療機関と連携をとりながら、スタッフ全員で、問題の解決や介護に取り組んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

海に近く静かなたずまいの住宅街に事業所はある。3年ほど前から職員の定着率が上がり、職員間のリレーションが大変よい。また、現メンバーは、仲間を尊重する姿勢があるとともに自主性が高い。そのため、新しい取り組みや付加業務に関してスムーズに進みやすい。例えば、ヒヤリハットの検討会議のための実態記録も職員全員で協力してデータ化し、結果としてヒヤリハットならびに転倒事故件数が減ったという好結果を得ている。管理者をはじめ職員は朗らかで、困難事例にも前向きに取り組んでいる

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	平成21年度にスタッフでホーム独自の理念を考えそれに添って、日々の介護を実践している。	本年に入り職員が話し合いの機会を何度かもち、法人全体の理念をベースに「グループホーム高松の理念」として制作している。職員が発語しやすく、気持ちを共有化しやすいものとして、また自らがつくった言葉として親しまれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会の会合への職員の定期的な参加を柱に、できるだけ、町内の中でのホームであるための努力をしている。また、町内の方の有志による、月1回のカラオケを施設全体での交流としている。	地域の高齢者の来訪を受け、月1回カラオケによる交流の機会をもっている。また、利用者も町内の敬老会へ出向いており、双方の行き来がある。職員も町内会の会合に参加し、顔なじみを増やしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	充分とは言えないが、地域推進会議を通して、認知症の方の接し方などを話す機会が出来つつある。どのようにしたらいいかとの質問もある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的に関われるようになり、利用者の様子はその時に報告している。また、その中で疑問点、家族の方の意見も反映されるようになってきた。その意見を、生かしている。	13人～15人の参加者がある。また、専門家や家族だけでなく、地域の高齢者にも参加してもらっている。今後の課題として、家族の参加数を増やすことと2ヶ月に1回の開催の実現がある。	会議のテーマを絞ったり、参加対象者の関心の高いプログラムを検討し、開催数を増やすことを期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	連絡を密にとってはいるが、生活保護や、精神障害者等の受け入れについての相談は受けている。また、受け入れが可能であれば、受けたケースもあり、看取りもした。	市ならびに包括には運営推進会議の案内と参加依頼をしているが、包括には未だ参加してもらえていない。市の担当者には前回参加してもらった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修等により、身体拘束への理解は深まったが、安全面の配慮から、玄関の施錠は実施している。また、命の危険がある場合は、家族の同意を得て拘束をする場合もあるが、短期間で終わるように配慮している。	心身の安全を第一に、家族と話し合いを都度もち、可能な限り身体拘束をしないケアに取り組んでいる。しかしながら、心身を守るため必要と判断した場合は、玄関に施錠することもある。	やむをえない場合「切迫性」「非代替性」「一時性」の要件を満たしているかを検討し、今後は書面による手続きをとることを期待する。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修等を通して、学ぶ機会を設けている。虐待が無いように常に注意を払い、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要性は感じているが、活用は出来ていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に、出来ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ケアプラン作成時、家族の面会時に、要望は聞くようにしている。また、そのことは、口頭で、あるいは個人記録で職員に伝えている。	家族によって関わりや進言の度合いに温度差があるため、それぞれの状況と求めに応じた対応となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の会議の中や、毎日の申し送りの中で、職員の意見は聞くようにしている。人事考課の面接時にも聞いている。	管理者に直接愚痴や不満を言える関係にあり、オープンで明るい風土がある。また、事業所運営など建設的な意見については、月1回の職員会議で発語がある。さらに、その意見は速やかに本部にあげられ、具体的な解決施策が実現している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本部と現場が連携しながら、取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新しい取り組みや、問題の発生時には、スタッフ全員が実践できるように取り組んでいる。また、出来るだけ研修に出れるように配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ホーム長が中心になり、駿河区のグループホームの集まりなどで、情報交換をしている。その中で、現状や問題点を出し合い、考える機会としている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時に要望は聞いているが、出来ることに関しては、希望に添うように努力している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談時や、入居時に、不安なこと事については聞くようにしている。出来るだけ家族の方も安心できるように、心がけている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他のサービスの利用は少ないが、必要なサービスについては、対応できるようにしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族のような雰囲気作りを大切にしながら、何でも言い合える関係を大切にしている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	特に、進行していく認知症の場合等、思いを共有し合いながら、本人の変化を感じていけるように、面会時の報告を密にしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	高齢となり、また、市外の方もいるため、なかなか難しい。	地域の高齢者の訪問(月1回カラオケ会)や散歩での顔なじみも多く、入所してからのなじみの関係をつくり継続することができている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の思いは受け止めながら、不必要なトラブルは避けるように、環境作りで心がけている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを考えているため、できる限り、ホームでの最期を目標にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	すべての面にわたり、思いや暮らし方の希望はかなえられないが、健康面を基盤にして、意向に添えるように努力している。また、出来るだけ思いは聞くように心がけている。	意見や希望をそのまま実現すること全てが本人の健康管理や周囲の生活維持によいとも言えず、集団生活における調整に苦慮するケースもある。その場合は代替的なものを提案することもある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	病院からの入所のケースや、生活保護の方も多いため、十分な把握は出来ていないが、家族の方が来た時に、昔の話を聞き、書きとめておくようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	体調や、機能面の状態に応じて、1日の過ごし方を考えている。出来るだけ、日中は寝ないように、声かけや、職員がそばにるように努力している。可能な限り、外出も検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回の職員会議の中で、問題点や、課題、介護方法等について話し合い、問題はそのままにせず、解決のための方法を話し合っている。必要な場合は、家族の同意をとっている。	モニタリングは全職員で取り組んでいる。管理者がプラン担当を兼務し、現場で職員に聞きとりや確認を繰り返している。その場で解決できることはし、問題を長引かせないようにしており、大きな課題のみカンファレンスに取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録、あるいは日報に書きながら、実践の結果や、問題点、利用者の様子、変化については、日々共有できるようにしている。健康面については、看護師への連絡を密にしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	体調が悪い時の、早期の受診や、往診等、家族には負担をかけずに対応している。また、個々の要求に対しては、職員の体制が許す限り、柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	重度化が進み、地域に出ている方は限られているが、地域での行事や、夏祭り等には、参加できる場合には出席している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	在宅医療との連携により、適切な医療を受けられている。科によっては、できるだけ、地域の医療機関の受診を心がけている。	基本的に受診支援は職員が担当している。投薬や付添者名などの基本情報は日報に記録し、医師からの指示や薬の変更などの重要情報については個人記録簿に重複記載し、情報の共有化と対応の標準化に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場内の看護師との連携が密にとれているため、適切な受診、診断が出来ている。急変時にも対応出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時は、必要があれば、看護師も同席し、情報を共有している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	在宅医療とも連携しながら、必要に応じて看取りの体制をとり、最後まで安楽に過ごせるように、スタッフ全員で取り組んでいる。また、家族との連携を密にしている。	看取りに取り組んでおり、2件の実績がある。看取りについては書籍による情報を整理し、所内研修を行ったうえで取り組んだが、さらに学習の機会を増やしたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訓練は定期的に行っていないが、連絡体制は出来ている。また、家族の意向も確認している。何度かの急変や事故を体験した中から、教訓を得ている。それを生かしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練の実施、居室が2階のため、大きな災害時は、特に夜間の避難は困難。地域との協力体制については、話し合いを持っている。	年2回、時間帯(夜間と昼間)を替え行っている。夜間訓練にも地域の方に参加してもらっている。事業所ができること、事業所が手伝って欲しいことなど相互に支援し合える内容について地域の皆さんには都度伝えている。	

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	時々、家族のようなケンカやトラブルはありますが、個々の思いは尊重するように心がけている。	入所当時は食事の時間のみだった利用者が、現在は重度化が進み常時食堂にいる状態が続いている。隣接のデイが閉鎖したこともあり、デイルームでゆったりと自分の空間を十分確保し過ごしていただけるよう現在準備を進めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定は大切にしながらも、危険なことに関しては、希望に添えないことも多い。出来るだけ不満が少ないように対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来るだけ希望に添えるようにと思っているが、動けない方に関しては、安全が最優先されることも多い。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみはそれなりに気を配っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食べられなくなるケースも多いことから、食べる機能に合わせて、安全な食事を心がけている。最後まで口から食べることを大切にしている。準備や片づけは出来る方が行う。	とろみや刻みなど形状を十分考慮し、口から摂ってもらえるよう努めている。また、食欲がない人には好みのもの(例: さしみ)にメニューを替える工夫にも取り組んでいる。プリンやヨーグルトなどの甘味で満足を得てもらうこともある。	食事の前に歌うなど、唾液を出すための支援の検討を期待する。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に合わせて実践出来ている。水分量については、好きなものを飲める工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	実践出来ている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	年々オムツの利用は増えているが、個々に合った方法で、介助している。また、オムツが必要になった場合には、清潔に保てるように援助している。	排泄ケアは、状態の必要性に応じ取り組んでいる。朝コップ1杯の牛乳摂取を排便支援として続けている。また、入所した当初はとどころかまわす放尿していた利用者が、現在は落ち着きを取り戻し自らトイレでできるようになった例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食べ物だけでは難しいため、個々に合わせた下剤のコントロールで、定期的な排便に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	全介助が多いので、曜日、時間の設定はしている。個々に合わせた入浴は、現在は難しい。	週2日、午後の時間帯に入浴している。ゆず湯などかわり湯にも取り組んでいるが、重度化が進み個浴が減り、現状はミストが増えている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	高齢となり、日中の安静も必要なことから、個々に合わせて休息をとっている。ただし、夜間の睡眠に影響しないように考慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	本人様子を観察しながら、副作用の発見に努めている。何かあればすぐに対応できる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外に出かけることが出来る方には、買い物や、外出等の楽しみを支援している。また、体力が無い方に関しては、無理のない生活を心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族の協力が得られる方は、定期的な外出できるように連絡をとっている。遠出については、現状では、体制的にも、体力的にも難しい。	近くの海岸や神社など散歩コースは豊富にある。30分～2時間弱と人によって幅があるが、それぞれのADLの状態によって散歩を日課とし楽しめている。誕生日月には外食に出掛けることも恒例化している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	生活保護の方も多く、現状では困難。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由にできるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂が狭いため、居心地良く過ごせなかったが、広い部屋が、空きそういため、今後、一人一人の空間が広げられるように検討したい。	建物が公的施設として造られたものであるだけに病院施設のような閑散とした印象を受けるが、ボランティアや実習者のお礼の手紙やアクティビティの成果品が飾られ、職員の努力が覗えた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一部の方々は、自室で過ごせるが、全介助が必要になった方に関しては、見守りが必要となり、自由に部屋にはいけない。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	始めは、一人一人の部屋に、色々なものがあつたが、車椅子の生活になったり、徘徊で危険になったりして、撤去して部屋のスペースを広げたケースも多い。	重度化が進みベッドを導入した居室が多い。使い慣れたものや好みのものや家族の写真を自宅から持ち込み、生活を楽しんでいる様子が覗えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来るだけ安全にと考えているが、見守りが最優先で、非常に難しい。		